

内容紹介

福島第一原発（1F）では事故後、高い放射線の中でどんな作業が行われているのか。知られざる現場作業員のありのままの日常を漫画で表現するや、一躍話題となり、単行本は17万部を超えるヒット作に。作者の竜田一人とは何者か。なぜ、原発作業員になったのか。一方、海外メディアも注目し、多くの読者に絶賛されるなか、「東電御用達の漫画家」「放射能を過小評価」といった批判も……。今後も1Fで働きながら「福島の実実」を描き続けるという、覆面作家の素顔を伝える。

初出

朝日新聞 二〇一四年十一月五日～十一月二十一日

※本文内の画像は、WEB用のものを転用しているため、解像度が低い場合がありますが、ご了承ください。

目 次

第1章 覆面インタビュー

第2章 福島第一で汗を流す

第3章 仕事依頼、途絶えた

第4章 震災に背中を押され

第5章 日給8千円で原発へ

第6章 メヒカリ食べ、去る

第7章 見たまま、描こう

第8章 編集者の血が騒いだ

第9章 ダントツの新人賞

第10章 「福島の現実」淡々と

第11章 現場作業員も読んだ

第12章 「だから何？」批判も

第13章 「鼻血」答え出ない

第14章 仮設に響く昭和歌謡

第15章 あの人だったのか

第16章 100年後の読者のため

第1章 覆面インタビュー

2013年9月26日夕。覆面姿の男が東京・新宿西口にある雑居ビルの貸し会議室に座っていた。

青地に深紅の「双頭の鷲（わし）」。メキシコ出身のプロレスラー、ドス・カラスのマスクだ。

男の向かいには、雑誌の編集者とライター、カメラマン。ライターが次々と質問を重ねる。

「何で原発に行こうと？」

「漫画を描いた動機は？」

「放射能怖くなかったですか？」

男は一つ一つ丁寧に答えた。

彼の名は竜田一人（たつたかずと）（49）。といっても、本名ではない。名前も、顔も伏せていたのにはわけがあった。

この6日前。竜田は東京・音羽にある講談社にいた。同社が発行する漫画雑誌「モーニング」の新人賞を受賞し、表彰式に出ていた。

ほかの受賞者や編集者、審査員を務めた漫画家ら約40人が集まった。

このときも覆面をズボンのポケットにしのばせていた。

だが、香川生まれの担当編集者、篠原健一郎（しのはらけんいちろう）（32）に「逆に目立ってしまうんじゃないですか？」と言われ、素顔で出席した。

竜田が身元を明かさない理由。それは受賞作品にあった。

「いちえふ 福島第一原子力発電所案内記」

いちえふ（1F）は福島第一原発の略称だ。原発事故後、作業員として働き、その体験を描いた（「案内記」は後に「労働記」に変わる）。

現場の情報を表に出すだけに、再び働けなくなるかもしれないし、雇い主に迷惑がかかるかもしれない。

そこで考えたペンネームは、震災後、運休になったJR常磐線の竜田駅と、一人の男が原発に行って描いた、という意味で付けた。

マスクもちょっとした遊び心から選んだ。ドス・カラスはスペイン語で「二つの顔」。原発作業員と漫画家の二つの顔を持つというわけだ。

13年10月3日発売の「モーニング」で「いちえふ」は初めて掲載され、同じ講談社発行の週刊誌「フライデー」（10月18日号）に、新宿で受けたインタビューの記事が出た。

マスク姿の写真は載らなかったが、「『覆面』で本誌の取材に応じた」との説明が添えられた。

講談社には取材依頼が殺到。単行本になった「いちえふ」は17万部のヒットとなる。

第2章 福島第一で汗を流す

2012年10月。

竜田一人（49）は福島第一原発2号機に初めて入った。

彼が漫画雑誌「モーニング」の新人賞を受ける1年前のことだ。

この日、竜田たちに与えられた仕事は原子炉建屋の隣にある廃棄物処理建屋の配管の補修作業だった。

数人ごとの班に分けられる。まず別棟にある休憩所で打ち合わせ。

二重扉の入り口から入り、ここで防護服を重ね着し、個人用線量計（APD）を受け取り、全面マスクをつけ、車で建屋に向かう。

「ご安全に！」

現場に向かう際、互いに声を掛け合う。一般の工事現場でも使われる言葉だが、竜田には初めてだった。

海の方に下る。1号機から4号機までが見えてくる。2号機は爆発を免れたため外観は損傷していない。

建屋内に入った。コンクリートむき出しの壁に配管が走る。

張り紙が目に残る。「0・8」と手書きされている。

放射線の線量当量率が毎時0・8ミリシーベルトという意味だ。同じ建屋内でも場所により大きく違った。

竜田は青いキルティングのようなつなぎも着た。防燃服だ。切断や溶接作業は火花が出る。火に弱い防護服を守るために必要なのだという。

ガーッ。ベテラン作業員が配管に電動カッターを押し当てる。

竜田は火花が飛び散るのを防ぐため、防燃シートをかざした。

2枚の防護服と防燃服にマスク。体中から汗が噴き出す。目にも流れてくる。でもマスクは外せない。まばたきでしのぐ。鼻もかゆくなった。だが我慢するほかなかった。

1時間後。休憩所に戻り、被曝（ひばく）線量が印字されたレシートをもらう。

1・28ミリシーベルト。それが、この日浴びた放射線量だった。

「俺もそんなもんだ。あと何日入れっかなあ」

ベテラン作業員は笑った。

会社のルールで、作業員の年間被曝量は20ミリシーベルトまでと決まっている。限度量が近づくと現場を外され、年度が変わるのを待たなければならない。

竜田は防護服を脱いだ。パンツまで汗でぐっしょり。長袖シャツとステテコも絞れば汗があふれ出そうだった。

このときの竜田には、被曝よりも暑さの方がより深刻だった。

なぜ彼は「いちえふ」で働き、その体験を漫画にしたのか。話は震災前にさかのぼる。

第3章 仕事依頼、途絶えた

福島第一原発の作業員の日常を描いた漫画「いちえふ」。その作者、竜田一人（４９）は東京近郊に住む「売れない漫画家」だった。

たとえば２０１０年２月、なじみの編集プロダクションの社員から仕事を頼まれたときは、こんな電話がかかってきた。

「この間描いてもらったキャバ嬢の、こんどは巻頭で読み切りで描いてくれませんか。１ページ７千円」

フリーの風俗ライターが書いた原作が後日メールで送られてきた。キャバクラで働くことになった女子大生が事件に巻き込まれる物語。

１カ月で仕上げた。２０ページで計１４万円。「コンビニコミック」と呼ばれる、コンビニエンスストアで売られる廉価版の漫画本だった。

当時の竜田は、別名で、２カ月に１本ぐらいの割合で、コンビニコミックの仕事をこなしていた。

ホスト、プロ野球選手、プロレスラー……。テーマはバラバラ。あらかじめ用意された原作や実話に沿って描いていく。取材費はない。

仕事の依頼は不定期だから、アルバイトもして生計を立てていた。

首都圏に生まれ、小中学生のころは矢口高雄（やぐちたかお）の「釣りキチ三平」が好きだった。大学時代は時代劇が専門の漫画家、平田弘史（ひらたひろし）のファンに。

大学では漫画サークルに入り、自己流で腕を磨いていった。

１９８９年に大学を卒業、いったん住宅設備会社に就職する。だが、「やっぱり会社勤めは合わない」と３カ月で退職した。

夏から長野県の農家に住み込み、野菜づくりを手伝う。八ヶ岳が見える広大な畑で、トラクターを操り、レタスを出荷した。

冬になると、東京郊外の実家に戻り、気が向いたら自室で漫画を描いた。だが、掲載されることはなく、夏になると、また長野に向かう。そんな生活が続いた。

96年夏。マージャンを題材にした作品が、ある漫画雑誌に載った。

以後、いくつかの作品が雑誌に載ったが、どれも人気は出ず、成人向けの漫画やコンピニコミックの仕事で食いつないでいくことになる。

キャバクラで働く女性の漫画から1カ月後。再び仕事の依頼が来た。

「今度は1ページ5千円の仕事がありますけど、やりますか？」

断ると、依頼はほとんど来なくなった。

竜田は漫画からいったん身を引くことにした。45歳の決断。10年8月のことだった。

第4章 震災に背中を押され

2010年8月。竜田一人（49）は漫画家をやめ、東京近郊にある知人の会社で働き始めた。

7カ月後。夕方から夜までが勤務時間の竜田は、出勤途中の路上で強い揺れを感じた。

東日本大震災。帰宅できたのは午後11時を回ってから。テレビをつけて驚いた。まちや港に津波が押し寄せる映像に息をのんだ。

翌日。外出した際に知人らと入ったお好み焼き屋で、福島第一原発の1号機が爆発したニュースを見た。

「東京から逃げた方がいい？」。焦る知人を、とりあえず落ち着こうとだめたのを竜田は覚えている。

テレビで、ボランティアや著名人が被災地に物資を届けたり、義援金を募ったりしているのを目にした。

自分も何かしたい。でも貯金は10万円ぐらい。なにも出来ない自分をふがいなく思った。

しばらくして、自分を雇ってくれた知人に退職したいと切り出した。

会社勤めは、自分には合わないと感じていた。そこに震災が起こり、背中を押された気分だった。

「どうせなら被災地で働きたい」

勤めと並行して、最寄りのハローワークに通い始めた。

原発での仕事も除外しなかった。ネットで調べ、自分なりに行っても大丈夫だと判断した。高いと月50万円になる給料も魅力的だった。

「本当に？ 大丈夫？」

相談員の心配をよそに、竜田は次々と原発関連の求人に応募した。

ほとんどが履歴書を送るだけで採用になった。「工事が決まったらまた連絡するよ」。電話で、決まり文句のように言われた。だが、再び連絡してくるところはなかった。

とうとう年が明けた。12年1月。

集合日時を具体的に指定してくる会社が現れた。しかし、集合日の前日に電話してみると、「おかけになった電話は現在使われておりません」というメッセージが流れた。

あとで聞いたところだと、元請けや上位の下請けの会社に名簿を上げて支度金を得るため、人数稼ぎをする業者もいたらしい。

4月。バイトで食いつないでいた竜田のもとに福島県郡山市の建設会社から携帯電話に連絡が入った。「連休明けに郡山に来られる？」

この2カ月後、ようやく福島第一原発の休憩所内で働くことになる。

震災から1年以上。ここまでの曲折が、一度はしまった漫画家としての竜田の心をくすぐり始めた。

2012年5月。

漫画家の道を離れ、被災地で働くことを目指した竜田一人（49）は、福島県郡山市にある建設会社の寮に住み込むことになった。

寮といっても普通の民家を借り上げて使っていた。10人以上の作業員が一つ屋根の下に寝泊まりする。

会社の事務所も兼ねていた。

ここでの生活も、竜田は後に漫画「いちえふ」で描くことになる。

漫画の主人公は「原発のがれきの仕事なら日給2万円」という言葉にひかれて郡山に行き、着くと、まず病院に連れて行かれる。

電離放射線健康診断。

放射線業務に就き、管理区域内に立ち入る労働者は受けなければならない健康診断だ。血圧や尿検査などに加え、皮膚や目の検査もある。

検査結果が出たら、放射線管理手帳、略して放管手帳を申請する。

雇い主に言われるままにスピード写真を撮り、100円ショップで自分の名前の三文判を買い、申請代理店に出向いた。

放管手帳は被曝（ひばく）歴を記録するもので、原子力施設で働く者には欠かせない。元請け会社が預かるため、手にしたのは原発を離れた後だった。

これで準備は整ったかたちだが、かんじんの仕事は始まらなかった。

それでも毎日、朝夕の弁当代と寮費の計1700円を天引きされた。

「これじゃあ、何しにここまで来たのか分からない」

竜田はほかの作業員たちと一緒に専務に直談判し、原発とは関係ない土木工事の仕事を回してもらった。

だが「日給2万円」との落差や、原発の仕事が始まらない不信が重なり、寮を去っていく者もいた。

福島第一原発での仕事が決まったのは6月になってからだった。

いわきに移り、「上の会社」を回らされた。

郡山の雇い先は、元請けから数えて7番目の6次下請けだった。

「上の会社」を回り、いろいろな書類に判をつき、ここで初めて自分の放管手帳も見た。

しかし、まだ待機生活が続いた。

漫画の主人公たちはヤケになって給料を前借りし、競輪やパチンコにつき込み、むなしさをかみしめる。

そうこうした末に、原発内の休憩所での仕事が回ってくる。

防護服などの装備品や飲料水をそろえ、作業員の汚染の有無を調べる……。数時間の勤務で被曝量は0・01～

0・03ミリシーベルト程度。

日給は8千円だった。

第6章 メヒカリ食べ、去る

竜田一人（４９）は漫画「いちえふ」で、福島第一原発で働く作業員たちの何げない日常を描いている。

１０人以上の男たちが一軒家で暮らすむさ苦しさや、車に相乗りして原発に向かう道中のばか話、そして原発内での作業風景を、のどかとさえ言えるタッチで展開する。

描いていない思い出もある。

２０１２年１２月下旬。

夜７時ごろ、ＪＲいわき駅近くの居酒屋に、同じ現場で働いてきた若手からベテランまでの作業員や、会社で事務をしている女性、元請け会社の重役たち１５人ほどが集まった。

ある作業の打ち上げであるとともに、竜田個人の節目でもあった。

この段階で被曝（ひばく）線量が１８ミリシーベルトに達していた。

会社が定めた年間の上限２０ミリシーベルトに迫り、いったん１Ｆを去らなければならなかった。

座卓を囲み、みんなで乾杯する。ほかの作業員たちは生ビールや酎ハイをあおる。竜田は下戸だからウーロン茶を飲んだ。

「本当にお疲れ様でした。工事、うまく行ってよかったですね」

料理をつまみながら、ベテラン作業員たちと話す。野球や競輪など、たわいもない会話が続く。

雇い主の社長がにこにこしながら言う。「また何かあったら頼むつべ。帰ったら何すんの？」

竜田は「とりあえず仕事探します。春からはまたここで働けますから、呼んで下さいね」とこたえた。

追加で料理を注文するとき、竜田には気になるものがあった。

メヒカリだ。

ぎょろつとした緑色の目が特徴の深海魚。いわきの特産品だ。

「これ頼んでいいすか？」

竜田が聞くと、ベテランは「食ったことねえのけ？ 食ってみ」と促した。

からっと油で揚げられたメヒカリ十数匹が皿に盛られて出てきた。

レモンを搾って食べる。

「どうだ、うまかっぺ？」

ベテランが聞く。竜田はうなずいた。「めっちゃウマいすね！」

実はこのメヒカリ、地元産ではなかった。このころ、まだ漁の自粛が続いていた。スーパーで竜田が見たのも愛知産のメヒカリだった。

「いわきのメヒカリが一日でも早く食べられますように」

ぶりつとした歯ごたえのメヒカリを食べながら、竜田は思った。

こんな時間を重ねた末、竜田は再び漫画と向き合う。

第7章 見たまま、描こう

2013年正月。

竜田一人（49）は半年に及ぶ福島第一原発での仕事を終えて、東京近郊の実家に戻っていた。

3LDKのマンションで母親（77）と2人で暮らす。

竜田は悩んでいた。

福島で体験したことを漫画にするかどうか――。

売れない漫画家生活に見切りをつけて勤め人になったものの、しつくりこず、勤めを辞めて、飛び込んだ「1F」だった。

ところが、そこでの体験が、再び漫画に目を向けさせる形になった。

それに、福島に向かう前から、あやしげなものも含めて、さまざまな情報が飛び交う原発に対し、「本当のところはどうなんだ」という思いも持っていた。

それだけに、自分が見たり、体験したりしたことを描いて残したい、という思いが募っていた。

原発で稼いだ金で、しばらくは食べていけるめどもたった。

あらためて1Fで働こうと思っても、被曝（ひばく）量が、会社で定める限度に達していたため、ゼロに戻す春まで待たなければならなかった。

1Fを漫画にしよう。

ジャージ姿で自室にこもった。

頭に浮かんだストーリーやセリフを、書き出しては捨てた。

フィクションで話を盛り上げることも考えた。漫画家としてはごく自然な発想だ。

でも、やめた。事実を誇張して描いたらデマを拡散するのと同じだ。

見たまましか描けない。結局、作業員の1日を再現することにした。

絵コンテにあたるネームを仕上げるのに1カ月かかった。

2月。細筆に黒いインクで絵を描き始めた。

たとえば廃棄物処理建屋での作業シーン。無数の配管が走る。複雑だが、基本は記憶が頼りだ。

あいまいなところはインターネットで画像を検索した。東京電力が報道資料として提供している写真や動画がとくに参考になった。

マスクや防護服、工具なども記憶とネット上の画像で再現した。

4月上旬。なんとか描き終えた。

全37ページ。出版社に持ち込む場合、20ページぐらいに収めるのが相場だが、2倍近くになった。

分量を増やしても作業手順や装備品を詳細に描きたかった。

「読み手を原発に連れて行く。一緒にそこを見に行く感覚」

それが狙いだった。

第8章 編集者の血が騒いだ

2013年4月中旬。

福島第一原発で働いた体験を漫画に描き上げた竜田一人（49）は東京郊外の実家で、その原稿をじっと見つめていた。

朝、Jヴィレッジに集合した作業員たちが車で1Fに向かい、仕事を終えて帰るまでが、いわば淡々と描かれている。

「さて、どこへ持ち込もうか」

絵コンテにあたるネームをまとめた段階で、ある編集プロダクションに見せたが、それきりになっていた。

思い切って直接、出版社の編集部に原稿を持ち込むことにした。

だが、最初の社では体よく断られる。そこで2社目に電話した。

「もしもし、持ち込みしたいんですが……」

この電話を引き取ることになったのが篠原健一郎（32）。講談社の漫画雑誌「モーニング」の編集者だ。アルバイトから回された電話に出ておどろいた。

「今、福島第一原発から来てるんです。あそこで働いてまして、作業員のことを漫画に描いたんです」

予想もしない話だった。原発作業員の話なんて、こっちから聞かせてくれと言ってもなかなか聞けない。

2日後に会う約束をした。

東京・音羽にある講談社ビル。

15階にある「モーニング」編集部には、竜田は作業服姿で現れた。

篠原は、さっそく完成原稿と絵コンテにあたるネームを読み始めた。

ちょっと分かりづらいところもあったが、すぐに感じた。

「こら、とんでもないぞ。めちゃめちゃ求められていたものやんけ」

香川県生まれで編集部歴7年。中堅編集者の血が騒いだ。

福島第一原発の作業員自身が描いたという驚きもさることながら、背景までしっかり描き込まれている。

「どちらかでプロとして仕事してたんですか？」

篠原の問いに、竜田は「いや、同人誌で描いていた程度です」と、うそをついた。

ほかの出版社に持って行かれたくない。そう思った篠原はとりあえず原稿を預かることにした。

「これ、このまま次の新人賞に回しますわ。いいですか？」

原発を扱った微妙な作品。編集長に売り込んでも没になりかねない。

それよりも新人賞で多くの編集者の目に触れれば、きっと高い評価を得るに違いない――。

篠原の「作戦」は、まんまと的中することになる。

第9章 ダントツの新人賞

2013年5月末で締め切った講談社の漫画雑誌「モーニング」の新人賞には、全323作品の応募があった。竜田一人(49)が福島第一原発での体験を描いた「いちえふ 福島第一原子力発電所案内記」も、この中に含まれていた。

モーニング編集部の篠原健一郎(32)が竜田から持ち込みを受けた後、応募箱に入れていた。篠原には自信があった。ただ、淡々と作業員の日常をルポする作風がどのくらい受け入れられるか、未知数だとは思っていた。

「いちえふ」は、26本までに絞った1次選考を通過。それをすべての編集者が審査した2次選考でも、ダントツの高評価を得た。

「あれはすごかった」
審査後、篠原は、同僚たちから声をかけられたのを覚えている。

8月26日、最終選考が講談社ビル2階の会議室で開かれた。
2次を通過した13作品を、漫画家の東村(ひがしむら)アキコ、漫画原作者の森高夕次(もりたかゆうじ)、編集長の島田英二郎(しまだえいじろう)らが審査した。

このときのやりとりはモーニングのホームページで公開されている。
森高——実際に働いて、その経験から描いている。頭の中で考えて、何か高尚なことを描こうとしている漫画が
ちっぽけに見えてしまう。

島田——体験したことをみんなと共有したい、描きたくて仕方がない、そんな気持ちがひしひしと伝わってくる。
社会的な使命感とは別のところにある、描くことへの欲望が熱量をもたらしているんじゃないか。

東村——外側から見ていると、恐ろしくてとんでもない作業が行われている場所だけど、内側にいると、ほのぼのとまではいかないけれど淡々とした日常があるということを描くのはすごく意味があると思います。

竜田の作品は前例のない高い評価を得て1位の大賞に選ばれた。

竜田は余計な心配をかけまいと、唯一の家族である母親（７７）にも１Ｆで働いていたことを黙っていた。

１０月。受賞の発表後、竜田は母親に掲載誌を渡して１Ｆで働いていたことを明かした。その直前、放射線についても説明した。無用な心配をさせない配慮だった。

息子の唐突な告白に、母親はきょとんとした様子だった。「それで、これからどうするの？」

竜田は答えた。「連載になるかもしれない。そしたらまた描くよ」

第10章 「福島の実現」淡々と

2013年9月中旬。

講談社の漫画雑誌「モーニング」の編集者、篠原健一郎（32）は入稿作業に追われていた。

新人賞の大賞に選ばれた竜田一人（49）の作品「いちえふ 福島第一原子力発電所案内記」掲載号の発売が迫っていた。

「いちえふ」は最初の4ページがカラーになることになっていた。

そこに、どんなキャッチコピーを添えるか。編集者としての知恵のひねりどころだった。

竜田が持ち込んでから新人賞をとるまで関わってきた篠原は、編集部一の「いちえふ」の理解者だった。

香川県出身。子どものころから周りを笑わせることが大好きで、一日にいくつもアイデアが浮かんた。

時に周到な計画も練るほどで、度が過ぎて学校の先生から度々しかられた。

「退屈な日常を少しでもざわつかせたい。とにかくひらめいたことを試したくてしょうがなかった」

作家にあこがれた。神戸大学時代、ある本のゴーストライターをしたが、じつと原稿を書くことがつらかった。

「それなら逆に編集者になって、たくさんの作家とせわしく、おもしろいこといっぱいやりたい」

07年に25歳で講談社に入り、以来7年間、「モーニング」で編集者を務めてきた。

10人以上の漫画家を担当し、実感していることがある。

漫画家の思いを誤解なく読者に届けるため、編集者は努力を惜しんではいけないということだ。

ストーリー展開、セリフ、キャッチコピー……。作品づくりの相棒として、「最初の読者」として、面白さと分かりやすさを追求する。その技術を磨いてきた。

そんな編集者の目で、あらためて「いちえふ」を読み返してみた。

原発の建屋内は放射線量が高く、作業員たちは小刻みに作業を交代、待機中は休憩所で昼寝をし、汗まみれになって何度も着替える……。

作業員たちのありきたりの日常が、驚きと新鮮さに満ちていた。

2、3日悩んだ末、キャッチコピーを決めた。

「これは『フクシマの真実』を暴く作品ではない」

「これが作者がその目で見た、『福島の実現』」

竜田が見聞きした一つの現実を淡々と描いたものだ。それを前面に打ち出すことにした。

第11章 現場作業員も読んだ

漫画雑誌「モーニング」で新人賞の大賞を取った竜田一人（49）の「いちえふ」は2013年10月3日の発売号に掲載された。

原発内での作業を漫画でルポする――。前例のない手法は、たちまち話題になった。

編集部には、はがきやメールなどで寄せられた感想は250を超え、ツイッターでつぶやく人も続出した。

掲載誌が残っていないか聞いてくる電話も相次いだ。

新人賞の作品では考えられないような反響だった。

担当編集者の篠原健一郎（32）は感想一つ一つに目を通した。

「マンガとしての可能性を何か感じる事が出来ました」（42歳男性）

「優れたルポルタージュ」（34歳女性）

「マスコミの報道とは違う、真実がわかって勉強になり、考えさせられました」（49歳男性）……

漫画研究家の藤本由香里（ふじもとゆかり）（55）は「特別なものにみえた収束作業が、私たちの日常と『地続き』であることを実感させる作品」と評価する。

作者がその目で見た、「福島の実実」

この篠原が作ったコピーのとおり、作品は「1F」の現実を映し出しているのか。

東京電力によると、1 Fでは、今も1日ざっと6400人が働き、作業している。

彼らの間でも竜田の作品は読まれた。「作業員」と記して、感想を編集部に送ってくる人もいた。

その評価も、おおむね好評だ。

「現場の状況をよく再現していて、記録的な価値がある」

こんな声が多い。

記者は、1、3号機で作業したことのある男性（52）に会った。

現地の事務所にあった「いちえふ」を読んだところ、自分が出入りする原発の敷地内が忠実に描かれているのを見て驚いた。

「現場を直接見た人にしか描けない」。そう確信したという。

作品には、放射能について作業員たちが淡々と会話を交わすシーンがある。

「実際も同じ。最初は不安がっていたけど、慣れてしまう。恐怖心がなくなる感じ」

作品に対して東京電力が編集部になにかを言ってきたことはない。「とくにコメントすることはありません」（広報部）としている。

しかし、評価する反応ばかりではなかった。

第12章 「だから何？」批判も

竜田一人（49）が、福島第一原発での作業体験を漫画で描いた「いちえふ」。予想以上の反響に、作品は雑誌「モーニング」で連載されることになる。

ただ、読者の反応は、決してプラス評価ばかりではなかった。

編集者の篠原健一郎（32）には、とくに心に残ったメールがある。

差出人は福島県いわき市に住む26歳の女性、と書かれていた。

「率直な意見を言わせていただきます。『だから何？』 ただ作者が『俺は原発で働いていたぞ』と言いたいだけではないですか？」

「大変な作業なのは読んで理解できましたが、私にとっては原発はさっさと無くなってしまえばいい」

東京電力や福島第一原発への怒りのほか、地元は風評被害に悩まされていること、自宅近くには放射線量の高いホットスポットがあることなどがつづられていた。

「危険をおおるような作品ではないはず。それでも誰かを傷つける可能性があるのか……」

もっと厳しい批判や非難も届くようになる。

「東電の回し者」「放射能を過小評価している」「東電から金をもらって描いている」……

インターネット上には「作業員募集のPR漫画」「東電御用達の漫画家」といった声も見られた。

原発事故と漫画。メディアによる取材も後を絶たない。

国内はもちろん、英紙ガーディアン、仏紙リベラシオン、AFP通信など、竜田を取り上げた海外メディアは15以上に上る。

ひとときわ関心を抱いたのが米国A P 通信社東京支局の影山優理（かげやまゆり）。福島第一原発の事故直後から東京電力を取材してきた。

2014年3月下旬、竜田と会った。

「作業員の日常をそのまま伝えていて、誘導は感じられない」

「作業員は戦場における兵士と同じ。放射線に対する準備は万全。だからといって（放射能を）過小評価しているという批判はおかしい」

影山はこんな考えを披露した。

「現場に行って表現する。それが文章ではなく漫画だった。アーティストであり、ジャーナリスト」

事故の風化を何より心配し、「国連で演説すべきよ。漫画で描いたようなことを、直接世界に向けて訴えるの」とまで言った。

思いも寄らぬ注目を集め、この先何を描いていくか、竜田と篠原は模索することになる。

第13章 「鼻血」答え出ない

「いちえふ」の連載が始まって、竜田一人（49）は東京近郊のアパートに仕事場を構えることができた。

約25平方メートルのワンルーム。家賃は5万円ほど。

アシスタントなどいないが、担当編集者の篠原健一郎（32）がたびたび訪れ、一緒に構想を練る。

2014年9月中旬。しばし沈黙が続いたあと、竜田が口を開いた。

「鼻血の話はどうですかね」

彼が福島第一原発で働き始めて間もない12年7月のこと。

作業員たちの休憩所で働いていると、仲間の声が聞こえた。

「また出してるよ」

見ると、休憩所に戻ってくる作業員の放射線量を測る係の男性が鼻血を出していた。

「すいません」。男性は恐縮したようすで鼻にティッシュを詰めた。

男性が鼻血を出したのはこの日が初めてではなかった。1日に2、3度出すことが1週間くらい続いた。

別の作業員が竜田に言った。

「あいつな、『もしかして、放射能のせい？』って本気で心配しとんねん。もしそうなら、同じ場所にいる俺たちも出してるわ」

「鼻血が出るほど被曝（ひばく）したら今頃死んでますよね」

みんなで笑った――。

14年春。人気漫画「美味しんぼ」の鼻血問題が起こる。

主人公の新聞記者らが福島での取材後、鼻血を出すなどのシーンが描かれたところ、風評被害を助長するなどとした抗議や批判が相次いだ。

竜田は、この表現に失望した。

福島の人がどう思うか。

「不安を払拭（ふつしょく）するためにも描きたいんすよね」。竜田が言った。

篠原は悩んだ。

「いちえふ」は竜田が見聞きしたものを描く作品だ。竜田たちは実際、鼻血を目撃して笑ったのだろう。だが――。

「不安の払拭を目的に描くと『いちえふ』が何か違うものになってしまう気がするんですよ。不安がる気持ちを笑う描写も、作品が傲慢（ごうまん）なものになってしまうように思います」

竜田の気持ちもわかる。だが、どんな思いでも、このまま描けば結論ありきになりそうで違和感がある。

竜田同様、篠原も低線量被曝で鼻血が出ることはないと考えている。それでも、竜田が目撃した一例だけでは描けないとも感じた。

「軽々しくは描けないな」。この話をどう描いたらいいか。2人は結論を出せないでいる。

第14章 仮設に響く昭和歌謡

福島第一原発で働いた体験を漫画で発信する竜田一人（49）。正体を伏せた覆面作家には、被災地で「第3の顔」を見せることがある。

2012年7月。

竜田は福島県いわき市内のある仮設住宅を訪れていた。

「1F」で働き始めて1カ月。

福島で知り合った男性が、ボランティアを希望する若者たちを連れて訪問すると聞き、休日を利用してついでいくことにした。

住宅街の一角に、250戸前後の仮設住宅が並んでいた。

集会施設に行くと、30人ほどが集まっていた。大体がおばあさん。別のボランティアグループが折り紙教室などを開いていた。

「勝手にやりますんで、もしよかったら聴いて下さい」

作業服姿で来た竜田は、照れくさそうに言うと、ケースからギターを取り出し、おもむろに弾き始めた。

♪惚（ほ）れて 惚れて

惚れていながら 行く俺に……

ざわついていたおばあさんたちが一人、また一人と竜田の方を向く。

彼が歌ったのは昭和の歌謡界をリードした三橋美智也の「哀愁列車」だった。

「兄ちゃん、若いのに詳しいね」

続いて竜田は、田端義夫の「かえり船」、岡本敦郎の「高原列車は行く」、さらに美空ひばりの「みだれ髪」も歌った。この曲は、いわき市の塩屋埼灯台を舞台にしている。

お年寄りたちは、手拍子したり、一緒に歌ったり。

竜田は子どもの頃から演歌好きだった。40歳のとき、あるイベントに出るためギターを本格的に始めた。

以来、ボランティアで、自宅近くの老人ホームで、懐かしの昭和歌謡などを披露していた。

仮設住宅からの帰り際、竜田は、集会施設の片隅に七夕飾りがあるのに気づいた。

7月7日は過ぎていたが、短冊の一つにこう書いてあった。

「双葉に早く戻りたい」

14年7月。竜田は再びギターを持ってこの仮設住宅を訪れた。

2年前と比べて、ボランティアは減っていた。

「あんた前も来たんでねえか？」

竜田が歌い始めると、そう声をかけるお年寄りもいた。

演奏後、また七夕飾りに目を引かれた。

「双葉に帰りたい」

2年前と同じ願いがつつられていた。

第15章 あの人だったのか

♪波の谷間に 命の花が
ふたつ並んで 咲いている

「いちえふ」の作者、竜田一人（49）が、ギターを弾きながら鳥羽一郎の「兄弟船」を披露すると、20人ほどの客たちから笑いが起きた。

2012年7月下旬。JRいわき駅前のライブバー「クイーン」。

ここで竜田が歌ったのは、この日が初めてだった。福島第一原発で働き始めて約2カ月。まだ「いちえふ」を描いてもいなければ、竜田とも名乗っていないころだ。

誰でも自由にステージで歌える「オープンライブ」に参加した。演歌という意外な選曲がウケた。

そんな様子をマスターの加藤功（かとういさお）（56）がほほえましく見ていた。

クイーンは1959年に別の場所で開店。普通のバーだったが35年前に加藤が継ぎ、ライブバーにした。

店は地下にある。地上部分のホテルには原発事故後、作業員の宿泊が多いものの、店にはあまり来ない。

竜田の宿舎は離れていたが、12年末に年間被曝（ひばく）量が限度に近づいて福島を去るまで、足しげく通った。

彼が店から消えてしばらくした13年10月。「いちえふ」が発表になる。

掲載誌の「モーニング」は、加藤が毎週欠かさず読む一冊だった。

ジャズ喫茶でコーヒーを飲みながら目を通す。でも「いちえふ」の作者が店の客とは思いつかなかった。

14年10月1日。加藤はフェイスブックで届いたメッセージに驚く。

「クイーンが次の『いちえふ』に登場するらしい」

どうということかと思ひながら、次号が出る翌2日未明、仕事後、コンビニエンスストアに走った。

早速めくると、竜田が店で「兄弟船」を歌う場面が描かれていた。

「ええっ、あの人だったのか」

この日の夜、クイーンに竜田が現れた。目があった加藤は、漫画を読んだことをうなずいて伝えた。

1Fで働くため福島に来た竜田にとって、クイーンは職場以外で初めて友人ができた特別な場所だった。

それでも正体がばれるのを承知でなぜクイーンのことを描いたのか。

「飛び入りでも気持ちよく演奏できるように」

そんな加藤の姿勢に、正体を隠し続けることに後ろめたさを感じた。

それに、作業話の周辺で起きることも、作業員の日常を描くのに欠かせない――。

クイーンに集う人との出会いが、竜田にそう思わせた。

2014年10月。竜田一人（49）と担当編集者の篠原健一郎（32）はJRいわき駅前で車に乗り込んだ。運転するのは竜田。「いちえふ」が単行本になって印税が入り、中古の軽乗用車を購入していた。

2人の目的は9月15日に全線が開通した国道6号を通ることだった。

福島を南北に結ぶ幹線道路。竜田が作業員として働くとき、福島第一原発への出勤ルートになる。

2人は1年ほど前も走ったが、原発事故の影響で、双葉町～富岡町の約14キロが通れなかった。

今回も、まずJR久ノ浜駅が見えてくる。海岸沿いの集落は津波で大きな被害を受けたところだ。

いくつもの油圧ショベルが土を掘り起こしていた。更地が広がる。

「この前はまだ、家の土台が残っていたんですね」

篠原は撮影しながらつぶやいた。

さらに北上する。田んぼだったところに、黄色の小さな花を咲かせたセイタカアワダチソウと、ススキが競うように広がる。

「原発で働き始めた2年前はセイタカアワダチソウばかりだったんですけどね」。竜田が言う。

富岡町の海岸沿いにあるホテルで車を止めた。建物は津波で倒壊している。昨年も来たところだ。

人気漫画「ドラゴンボール」のフィギュアと、アニメ「NARUTOーナルトー」のDVDが地面にあった。

1年前と「変わってない」。2人は口をそろえた。

大熊町に入る。行き交う車は予想以上に多い。前回は通れなかった。

「あれ、1Fです」

竜田が指さす。森の間から、福島第一原発の白い排気筒が見えた。

南相馬市まで行き、引き返した。

帰り道。楡葉町のJR竜田駅に立ち寄った。竜田がペンネームにしたところだ。

駅舎にある飲み物の自販機が作動していた。1年前はJRがまだ運休していて、動いていなかった。

変わった光景と変わらない光景。

二つの現実を、竜田と篠原は改めてかみしめた。

竜田は今後も福島第一原発で働きながら「いちえふ」を描き続けたいと考えている。「見聞きしたことを記録として残したい」

篠原も同じ思いだ。「100年後の読者のためにも、適当なことは描けない」

プロメテウスの罠〔57〕 漫画いちえふ「読み手を原発に連れて行く」

著 者 朝日新聞（関根和弘）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2015年1月8日 WEB新書版発行

2015年12月31日 EPUB版発行

©2015 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86612-578-7

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2015年1月8日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。